Young Officials Camp 2012

1　行 事 名　ヤンググオフィシャルキャンプ２０１２
2　日　　程　平成 24 年 8 月 10(金)～12 日(日)
3　場　　所　埼玉県立スポーツ総合センター、上尾市総合運動公園体育館
4　集合場所　　埼玉県立スポーツ総合センター
　　住所：埼玉県上尾市東町 3-1679
5　担当講師
Petr SUDEK　氏（スロバキア）　FIBA 講師
吉田　利治　審判委員長
関口　知之　氏、　岩田　千奈美　氏、　小澤　勤　氏、　安西　郷史　氏、
吉田　憲生　氏、　山崎　人志　氏、　高城　邦弘　氏、　渡邊　整　氏、
前田　喜庸　氏、　平野　彰夫　氏、　野村　考一　氏

6　総務担当
小林　剛樹　氏、　高橋　哲雄　氏、　栗原　俊之　氏　（以上、総務グループ）
貫井　義昭　氏、　和泉　淳一　氏　（以上、広報クループ）

7　参加者（４８名）　※敬称略
粟　竹　裕　幸（東京都）、安　杖　沙　織（秋田県）、
和　泉　　努（兵庫県）、稲　田　　篤（鳥取県）、
岩　井　遥　河（東京都）、岩　月　遼　司（長野県）、
内　海　建太郎（大分県）、榎　本　麻　衣（長野県）、
逢　坂　麻　衣（福岡県）、大　下　俊　之（島根県）、
小笠原　　望（東京都）、荻　原　奈央子（東京都）、
奥　原　佑　典（神奈川県）、折　目　大　河（千葉県）、
管　　祐　介（東京都）、北　沢　祐香里（滋賀県）、
北　場　早智恵（大阪府）、京　極　　舞（熊本県）、
桑　原　一　貴（東京都）、紺　谷　智　広（新潟県）、
近　藤　　賢（愛知県）、佐　伯　和　哉（岐阜県）、
坂　田　一　也（愛媛県）、佐々木　佳　祐（青森県）、
指　田　裕加子（東京都）、清　水　浩　貴（東京都）、
下　嶋　杏　実（京都府）、末　永　佳奈子（東京都）、
関　　倫　子（埼玉県）、田　上　理　賀（岡山県）、
千　田　美　幸（秋田県）、對　馬　誉　大（青森県）、
中　村　亮　介（奈良県）、早　川　貴　章（新潟県）、

廣　瀬　晃　弘（茨城県）、藤　井　　亮（富山県）、
藤　田　公　介（香川県）、細　川　理　恵（香川県）、
正　木　あずさ（山梨県）、松　尾　　英（佐賀県）、
松　本　彩　織（岩手県）、松　本　拓　真（東京都）、
三　沢　奈　央（山梨県）、三　角　　峻（神奈川県）、
森　田　純　平（埼玉県）、山　口　和　也（千葉県）、
山　高　勇　樹（広島県）、湯　浅　真梨也（和歌山県）
※あいうえお順

8　日　程

8/10(金)　会場：上尾運動公園体育館、埼玉県立スポーツ総合センター

12:30～　受付開始（スポーツ総合センター）

13:00～　開　講　式（司会進行：総務グループ長　小林　剛樹　氏）
・挨　拶　審判副委員長　関口　知之　氏
・諸注意　総務グループ長　小林　剛樹　氏

13:30～　徒歩で移動（上尾運動公園体育館）

14:00～　【実技Ⅰ】ツーメンメカニクスについて
16:00　FIBA 講師　Petr SUDEK 氏（スロバキア）

16:15－　徒歩で移動（スポーツ総合センター）

16:45～　【講義Ⅰ】English Comminication への取組み
国際渉外グループ副長　野村　考一　氏

17:30～　夕食（総合センター内食堂）

19:00～　【講義Ⅱ】ルールについて（ＤＶＤ講習）
規則グループ長　平野　彰夫　氏

21:00－　タクシーにて宿舎へ移動（Rio 上尾）

8/11(土)　会場：上尾運動公園体育館、埼玉県立スポーツ総合センター

7:30－　朝食（各自で手配）

8:00－　タクシーにて移動（上尾運動公園体育館）

9:30～17:00　【実技Ⅱ】高校生のモデルゲームを利用した実技講習
※　４班に分かれて、担当講師による実技指導

18:00～　夕食（総合センター内食堂）

19:00～20:45　【講義Ⅲ】FIBA 講師による講義

20:45～　閉　講　式（司会進行：総務グループ長　小林　剛樹　氏）

・挨　拶	審判委員長	吉田　利治　氏
・講師講評	審判副委員長	関口　知之　氏
・諸連絡	総務グループ長	小林　剛樹　氏

21:00－　タクシーにて宿舎へ移動（Rio 上尾）

8/12(日)　会場：上尾運動公園体育館

7:30－　朝食（各自で手配）

8:00－　タクシーにて移動（上尾運動公園体育館）

9:30～14:00　【実技Ⅲ】高校生のモデルゲームを利用した実技講習
※　４班に分かれて、担当講師による実技指導
※　帰りの交通機関の事情により適宜解散する。

14:00　講習会終了

1. 実技Ⅰ：ツーメンメカニクスについて

（Petr SUDEK 氏）

ツーメンにおいてゲームの始まりとなるジャンプボールは非常に大切なものである。主審は、適切な高さ、速さ、方向にボールをあげる必要があり、そのどれかが適切なものでないと判断した場合、副審はすぐにプレイを止めなければならない。ジャンプボールの練習には、ボールをリングに下から通してそのまま真下に落ちるような練習が有用である。

また、ツーメンにおいては、二人でプレイをとらえることが必要である。常にボクシングインの意識をおき、プレーヤーを 10 人すべてとらえなくてはならない。ボクシングインをするためには審判は常に位置取りを考え、その位置に動かなくてはならない。

2.講義Ⅰ：English Communication への取り組み

（野村孝一氏）

外国人が日本人と話すときにもっとも戸惑うことは、日本人は反応が薄いことである。日本人は黙って考えてしまう癖があるので、外国人は、日本人の反応を見て、話が通じていないのか、それとも、話題についての返答を考えているのかわからないのである。そのため、日本人と外国人の会話はぎくしゃくしてしまうのである。

また、国際的に審判員に求められていることは、ディスカッション能力である。これは日本人にはもっとも苦手なもののひとつであるので、トレーニングを積む必要がある。トレーニング方法を示すものとして、ジョハリの窓が示された。（図 1 参照）

図 1 ジョハリの窓

		自分	
		知っている	知らない
他人	知っている	両者とも知っている部分 1	自分は知らないが他人は知っている部分 2
	知らない	他人は知らないが自分は知っている部分 3	両者とも知らない部分 4

1 の部分は自分も他人も知っている部分であり、明らかな部分である。一方で 4 の部分は両者とも知らない部分であるため、新しい可能性が秘められた部分である。この部分を発見していくことが成長には不可欠である。また、2 の部分は、自分は知らないが他人は知って

いる部分である。これはできるだけ、自分自身が認知できるよう努力することが大切である。自分自身の審判のビデオをとって研究することはこの２の部分を少なくするための方策である。３の部分は、他人は知らないが自分は知っている部分である。これは自分の中に大切にしまっておくほうが良い場合もあるが、ディスカッションを行う際などには主張すべきときもある。
このジョハリの窓を常に意識して自己を形成していくことが必要である。

3. 講義Ⅱ・Ⅲ：ルールについて（DVD 講義）
（平野彰夫氏）
　国際的な試合の DVD をもとにルールの解釈についての講義であった。アンスポーツマンライクファールの解釈は、新ルールの適用によって、オートマティックなものに集中してしまいがちであるが、ハードファールからのアンスポーツマンライクファールの適用を的確に行わなければならない。また、ポストマンに対して両手をあててディフェンスを行うことは、ファールの要因となるので、的確に判定しなくてはならない。

4.実技講習Ⅱ
小山西―新総和国
相手審判　佐伯和哉氏
講師　小澤　勤氏・吉田　憲生氏・平野　彰夫氏
　プレーの流れを意識し、ファールとなる現象が起こったときでも影響を予測することを課題として取り組んだ。しかし、どこまでを影響がないととらえるか基準が曖昧になってしまった。影響があるかないかの基準づくりも必要であることを学んだ。平野氏から、トレイルからリードかわるときに躊躇し、足が止まる場面があるため、躊躇せずに走りこんでから全体を見るべきであると指摘をうけた。

松山―越谷
相手審判　清水浩貴氏
講師　小澤　勤氏・吉田　憲生氏・平野　彰夫氏
　男子のゲームであったため、足を動かすことを意識し、常にプレーを先読みすることを課題とした。小澤氏からは、リードで四番エリアを見に行くための開く動きが遅いと指摘をうけた。吉田氏には、走り方が低姿勢であるため、大きく見せる走り方にすべきであると指摘をうけた。平野氏には、ツーカウントの際に手を高くあげてカウントのジェスチャーをすべきであると指摘をうけた。

5. 講義Ⅳ　FIBA 講師による講義

講義はすべて英語で行われた。まず、メカニックはゲームに適応するための道具にすぎず、審判は常にプレーの一歩先を行く努力が必要だという話があった。また、ツーメンの場合はコート上にいる審判は二人だけであるので、二人で協力して試合を運営するという意識がとても大切であることを学んだ。特にリバウンドプレーのファールに関しては、リードが 60%ファールを宣するが、トレイルは残りの 40%を宣するため二人で見る意識が必要であることを学んだ。

最後にもっとも良い審判とは、試合が終わったあとに、「今日の審判は誰だったか」という疑問が観客やチーム関係者から起こるくらい試合に溶け込んで目立たない審判であることを学んだ。

6. 全体を終えての感想

YOC に参加させていただくにあたって、目標にしていたことが二つあります。まず、一つ目は、今まで自分が取り組んできたことを、実技講習を通じて、講師の方々に見てもらい、その方向性で良いのかを確認することです。二つ目は、バスケットボールに関する英語での講義は初めてだったので、ひとつでも多くバスケットボールに関しての専門的な語彙を身につけ、英語でのディスカッション能力を高めることでした。

私が今まで特に意識して、取り組んできたことは、プレーヤーへの対応や立ち振る舞いを審判らしくみせること、そして、しっかりと足を動かしてスペースウォッチングをすることです。実技講習では、小澤勤さん、吉田憲生さん、平野彰夫さんに反省をいただきました。小澤さんには、リードでゴール下のプレーを見るときに、体の角度を変えてより細かくスペースウォッチングをしたほうが良いと反省をいただきました。今までゴール下のプレーを見るときに最初のスペースが見えたらそのまま止まっていたので、すべてのスペースが見えるように足を使って体の角度を変えていきたいと思います。また、吉田さんと平野さんからは主に魅せ方についての反省をいただきました。その反省から、今後、オフィシャルズマニュアルに忠実なレポーティングを求めるだけでなく、自分の体型を生かした立ち振る舞いや、走り方を追求していきたいと思います。

英語のディスカッション能力を高めるという目標に関しては、自分が思ったよりも専門語彙が少ないと感じました。FIBA 講師の Petr SUDEK さんの講義を聴講して、思っていた以上に専門的な言い回しがたくさんあることを知りました。また、野村孝一さんの講義を聴講して、ディスカッション能力が審判員に求められることも再認識しました。今後も英語でメモをとることを継続して行っていくとともに、英語版のルールブックや、オフィシャルズマニュアルをさらに読み込んで、専門語彙や言い回しを自分のものにして英語でディスカッション能力を高めていきたいと思います。

最後になりましたが、このたび、このような講習会を開催、運営していただき、本当にありがとうございました。この講習会で自身の審判活動への方向性をさらに明確化するこ

とができました。これからその方向性を軸に、さらに上を目指して取り組んでいきたいと思います。

以上